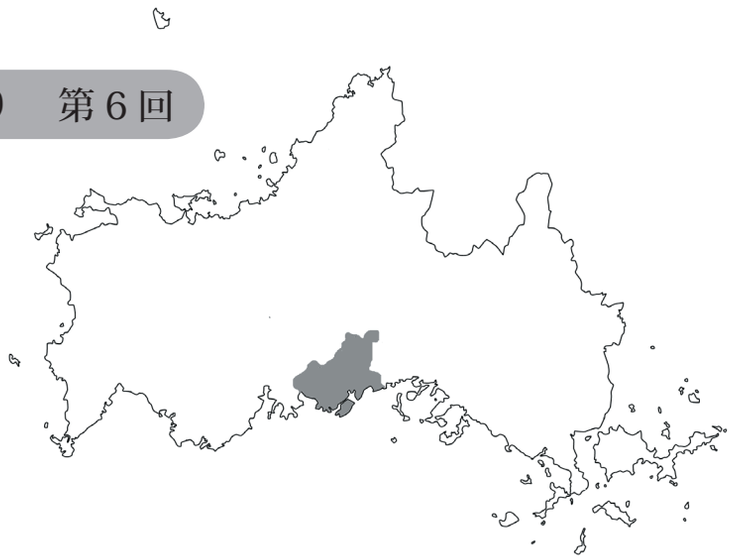
郡市医師会めぐり　第6回

防府医師会



市名が「周防の国府」に由来する防府市は、律令時代からの歴史のある町であり、また、明治初期は山口県の近代医学揺籃の地でもあった。明治5年、中央政府に倣い山口県でもドイツ医学を採用することとなり、明治7年に佐波郡三田尻(現在の防府)に医師養成所を含む衛生行政の中心として、華浦医学舎(後に華浦医学校と改称)と華浦病院が設立された。維持経費の高騰により学校の存続期間は比較的短かったが、昭和61年、市内松原町には「山口県立華浦病院・医学校跡」の顕彰碑が建立され、その説明版には「山口県における近代医学の曙光はこの地で開花したと言える」とある。医学校に学んだ者の中には後年になって当地で開業した者も多く、そのため防府には代々続く古くからの医科家系が多く、華浦医学校の流れを汲む病院もある。

山口県立華浦病院・医学校跡

防府の市制施行に伴い、昭和11年に旧来の佐波郡医師会が防府市医師会と佐波郡医師会の二つに分離独立したが、この防府市医師会が現在の防府医師会の起源である。ただ、戦後の昭和22年に全国的な医師会組織の改組が行われ、防府市・佐波郡の医師を擁して新生「防府医師会」が成立し今に至っている。

佐波川の河口に開けた防府市は、人口は12万に満たないが、南側を除き三方を山に囲まれているため独立した都市圏をもっている。ただ、どこの地方都市でもそうであるように、天神様の門前町として賑わった中心市街地には嘗ての面影はなく、以前は大手企業の支店や官公庁の出先機関も(古くはNHK山口放送局も)防府に置かれていたが、現在その多くは山口市に移転している。以前から地域圏として山口・防府地区と呼称されてはいても各々が独立した都市圏だったはずが、防府医療圏に含まれる佐波川上流の徳地町が山口市に編入合併され、少しずつ流れが変わりつつある。

市民公開講座ほうふ健康フォーラム
講演3題のほか、体験コーナーや展示品コーナー、健康相談を行った。

第5次医療計画作成時には、とうとう医療圏としても山口・防府地区との設定がなされており、3年前には保健所(環境保健センター)までが一部の機能を残しているとはいえ山口市に移転した。

さて、設立当初45人の会員でスタートした防府医師会の現在の会員数は、A会員86名、B会員77名、C会員57名の計220名で、A会員の平均年齢は60.9歳とやや高齢化してきている。全体的な印象では、残念ながら医師会活動はひいき目に見てもそれほど活発とは言い難い。まとまっていると言えなくもないが、医師会行事への参加者は比較的少数で固定化しており、医療情勢の変化に対応した現状変革の意見はあまり出てこない。個人のレベルでいろいろな新たな試みやネットワークがあっても、医師会全体に波及する大きいうねりとなっていないのが現実である。

昭和58年までの三十数年間、市の中心部に山口県立総合病院(現山口県立総合医療センター)が存在し市民病院的役割を果してきたせいか、ついぞ医師会病院設立等の機運は生まれず、医師会事業で最大のものは看護専門学校の運営である。防府看護専門学校は准看護科・看護科を併せ持ち、昨年、一般対象の記念講演を含めた創立六十周年記念式典が盛大に挙行された。卒業生の総数は約3,400名を数え、広く県内外の医療の現場で活躍している。近年、看護学校の維持は郡市医師会にとっては大きい負担となりつつあるが、看護師養成事業の重要性は時代とともに増しており、医師会として今後もコミットし続けることは確実である。

また、医師会立看護学校としては県内唯一、時代の要請ともいえる潜在看護職員再就職支援研修会を一昨年から毎年実施しており、数多くの参加者がある。学校の枠を超えた社会的活動として今後も継続の予定である。

対外広報活動としては、平成18年から歯科医師会、薬剤師会を含めた防府三師会共同で、「市民公開講座ほうふ健康フォーラム」を開催している。平成18年の「タバコと健康」に始まって、毎年、認知症、メタボリックシンドローム、がん等のテーマを決めて一般向けの講演(三題)会と、健康相談や体験コーナーを併せ行い、毎年5～600名の来場者で会場は溢れかえる。市行政も全面的にバックアップしてくれており、講演終了後は三師会長、防府市長、健康福祉センター所長が壇上で、その年のテーマに沿った健康に関する共同宣言を読み上げ、来場者全員が唱和してお開き

防府看護専門学校創立六十周年記念行事
表現者「たけ」こと河村武明氏による記念講演、「ありがとうのお話」

となる。防府市の秋の行事として定着しつつある。

医師会の中で一番アクティブなのが男女共同参画部会である。県内医師会の中で最も早く、平成 18 年夏に防府医師会女医部会として設立総会を行い、以後、毎年夏に女性演者による特別講演と男性会員も参加しての部会総会を開催している。それだけではなく、毎年開催の女性医師情報交換会や女性医師に関するアンケート調査等の活動は、県医師会の男女共同参画部会をもリードするもので、各郡市医師会の男女共同参画部会のお手本ともなっている。

医療・介護・福祉の連携については、地域包括ケアシステム構築に向けて少しずつではあるが具体的な歩みが始まっている。医師・歯科医師・薬剤師・ケアマネージャー・介護事業者等と地域包括支援センターの多職種による、高齢者支援のシステムを考える「はあとふるねっと」を立ち上げ、毎月、事例研究や情報共有を行い、顔の見える関係作りと地域独自のケアシステムの方向性を模索している。

その他の特色といえば、当医師会では昭和 43 年に創刊され、今年の新年特集号で 470 巻を数える月刊の防府医師会報を発刊している。担当理事には大きな負担がかかっているが、毎月 4 ～ 5 人の会員からの原稿を掲載し、会員相互のコミュニケーションの一助となっている。また、毎月行われる学術講演会は三師会合同で開催されるのも特色で、講演会の後の情報交換会が、医師会のみならず防府の医療関係者間の親睦のために役立っている。

さて、地域の高度医療の中核は山口県立総合医療センターであり、昔も今も、市民にとっても医師会員にとってもラストリゾートであることに変わりない。医師会員と総合医療センターとの協議会は毎年開催されるが、医師会員の出席率の一番高い会合となる。医療機関の機能分化と病診連携については、総合医療センターの方がむしろ積極的であり、地域連携クリティカルパスの作成や総合医療センター各科主催の勉強会の開催等の幅広い活動がある。総合医療センターの目標である地域医療支援病院化を医師会としても積極的に応援するつもりである。また、一次救急については未だに休日のみの対応となっており、行政との調整が進展していない。今後想定される総合医療センターの一次救急からの撤退までに、早急なシステム構築の必要性を痛感している。

当医師会は本年 4 月から一般社団法人として新たに歩みを始めるとともに、耐震補強に合わせ医師会館の大幅なリニューアルを計画中である。これを機会に医師会組織も活性化を図り、激変する医療環境に対応して今後の地域医療を担うべく、積極的に活動していかなければならないと考える次第である。**[防府医師会副会長　清水　暢]**

防府医師会館

大平山から防府市内展望